
影喰い

双葉 燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影喰い

【Nコード】

N1557P

【作者名】

双葉 燐

【あらすじ】

モノには全て影がある。それは何故か……。影はモノが存在しているという事の証明である。では、逆に影が無くなってしまえばどうなるだろうか……。影を失ったものは存在をいがめられ、不安定になり。最後には存在を失う……。

一人の少年が軸となり物語が動き出す。

#0 影

「俺は神だ」

ビルの屋上に立って町を見下ろしている一人の青年が叫ぶ。動きやすそうな服の上に、どこで見つけてきたのか魔法使いのような口―ブを身に付けている。

「俺だけがこの腐れきった世界から人間を開放することが出来る」
大きな笑い声が夜の空に吸い込まれていく。

「この力は破滅の力。救いなんて物じゃない」

青年の背後で声がする。屋上に繋がる階段の扉が開くような気配がしなかったので別の場所から表れたのだらう。

驚くものの力をもっているという余裕からか、警戒するという事すらしない。ゆっくりとした動作で後ろを振り返る。

視線の向こうで黒い影がゆっくりと体を起こす。身を包んでいた何かが解けるように霧散し、足元へと吸い込まれるように消えていく。後に表れたのは身長170センチほどの少年。顔は良く見えな
い。

そういった状況ではあるが、その少年が何者であるのかを問う事をしない。手を左右に広げると何かをアピールするように声を上げる。
る。

「何故そう悲観的になる。この力はすばらしいではないか」

そついうと見せびらかすがごとく両手を腰の高さまで挙げる。それに伴って足元にある影が蠢き、黒いものが噴出す。噴出したそれは、青年の背後で孔雀の羽根のように広がる。

それを見て少年はどんな表情をしているのか、ズボンのポケットに手を入れた状態から微動だにしない。

「これがあれば何でも出来る。そうは思わないか？」

そついうと、背後に広がる黒い壁がうねり形を変える。半分に割れたかと思うと、片方は熊の形をなす。もう片方はさらに半分に分

かされると、片方は青年の手の中に納まり、銃身のながい銃へと変貌する。残った一つは犬のようで犬でない異形へと変わる。

手に握られた銃の感触を確かめるとこの少年のほうへと顔を向ける。一方で少年は動く気配がしない。

「手に入らないものでも、手なずけられないものでも、この世に存在しないものですら、この力は形に出来る。すばらしいではないか。それを何故貴様は、破滅の力という」

青年はこれを言いたかったのだろうか。この力を否定された事がそんなに気に食わなかったのだろうか。少年に向けている銃を握る手に力が入っている。周りの熊と異形も、地面に張り付き、いつでも襲つてやると言っているように見える。

その様子を見て少年はくだらないとため息をつく。どうしてこんな奴が力を持ったのか、疑問で仕方がないといった感じた。

「貴様も他のものと同じで、私をさげすむのか」

どうやら今の行動が気に障ったらしく、怒りのボルテージが上がっているようだ。きっかけを作ったのは少年のほうかも知れないが、暴走しているのは明らかに青年のほうである。

「消える！」

指先に力が送られて銃の引き金を引く。漆黒の弾丸が放たれる。それを合図に左右に構えていた熊と異形が地面を蹴る。続けざまに引き金が引かれ無数の弾丸が放たれる。

それを見てため息をつく少年は脚を少しだけずらす。それだけの動きで青年の時と同じように足元の影が蠢き守るように障壁が現れる。壁の出現と同時に弾丸が壁に刺さる。壁に接触した弾丸は解けるように壁に飲み込まれていく。

青年が様子を見るために打つのを一時的にやめたとき次の変化が起きる。少年を守るように展開されていた壁が二方向に分かれる。それぞれが熊と異形のほうへ。そして次の瞬間、飲み込まれていた弾丸が吐き出される。

弾丸は熊、異形に襲い掛かる。一瞬耐えた後、残りの弾丸に身を

体を削られていく。ついには形を失い靄となってその姿を消す。

その光景を青年は黙って見守っていた。目の前の光景にどのような感情を持ったのだろうか。持っていた銃が姿を失い靄となって消える。その代わりに青年の背後には先ほどと同じ孔雀の羽根のような黒い壁が存在している。青年の感情に呼応しているかのように黒い壁が蠢く。

「少しは出来るようだな」

笑みを浮かべると、背後の壁が一際蠢く。そして、青年が左右に手を広げた後、何かを引つ掻くように腕を振るう。刹那、黒い壁から蟹の腕や、脚に似たものや、蟻螂の腕などが壁の中から現れると勢い良く少年へと襲い掛かる。

それを見ると先ほどと同じように壁を出現させる。青年から放たれた爪が壁と接触する一瞬、少年は不意に距離を取る。直後、いくつもの爪が壁を突き破り先ほどまでいた場所に突き刺さる。

空を裂き地面に突き刺さった爪は、地面から外れると青年の背中まで縮み千手観音のような風貌を見せる。

「親は誰だ？」

少年は睨みつけるように青年を見るとそういった。それに対して青年は何を言っているのかというように背中にある爪を動きを確認するようにゆらゆらと動かしている。

「知らない」

青年は一通り動作を終えると少年のほうを向き一喝する。

「そうか……話す気はないか……」

うつむき加減に呟くと右手をそつと地面を平行に出す。それにつられて影も動く。足元の影から黒い物が噴出し、掌と地面とを繋ぐ。何かを握るように手を握ると鞘から剣を抜くように腕を振るう。黒い靄が払われ月の光に黒い刃が鈍く光る。

剣を構えると地面を蹴る。その様子に何も言わずに背中の中を爪をわずかに後ろに引きタイミングをはかり爪を振り下ろす。

左右に少しづつ体をそらしながら爪を交わし、交わせないものは

切り伏せていく。出来る限り直線的に進む。

左に体をそらしたところから爪が振ってくる。それを舌打ちと同時に体をひねり、剣を振るう。振り下ろされた爪を砕くと横にすべる体を止める。無数の爪が同時に他方から迫ってくる。脚に裏に黒い靄があつまる。

地面を砕く音が響くと周囲に粉塵が舞う。針山のような光景が広がっている。

舞い上がってる粉塵の中から剣を構えた少年が飛び出す。それに対して青年は新しく背中から無数の爪などを作り出し叩きつける。

その全てを叩き斬ると、あと一歩で剣が届く距離まで詰める。その時不意に地面が揺れる。一瞬脚が止まってしまい、振り下ろされる爪に対しての対処が遅れ、舌打ちをすると後ろに距離をとる。それにより青年のいるところの全体が見える。

「ここで負けるわけには行かない」

まさか……。そう思っただけの行動した時には遅かった。青年は屋上の床を砕きビルの中へと逃げた。あとを追おうとした時には次の振動が屋上を揺らす。

「くそっ」

悪態をつくと手から剣を消すと慌てて屋上から外へと身を投げる。背中にコウモリのような翼膜のある羽根を生やすと空にとどまり、ビルを振り返る。

背中の中ほどまである髪は首の後ろほどで結わえられ、女の人のようなさらりとした髪が、風になびいている。月の光の下で見る少年の顔は女の子と称しても良い気さえする。

土台を失ったビルは砲撃を受けたように下へ下へと崩れてゆく。

「柱を喰ったね……」

あたりに粉塵を巻き上げる形を失ったビルを見下ろしながら呟く。この粉塵の中では青年を見つけることさえ困難である。

どうする事も出来なくなったビルの残骸を背中に空の中に消える。道路には粉塵が漂い車の進行を妨げている。粉塵を目の前に慌てて

ブレーキを踏んだのかブレーキ音が響いている。

#1-1 二つの葉

——次のニュースです。昨夜遅くに大手株式会社の支店が崩壊するという事件が発生しました。崩壊したと思われる時刻、その付近で震度3程度の揺れが観測されておりそれが原因だと思われますが、原因は目下調査中とのことです。関係者の話によりますます……。

昨夜の事が今朝のニュース番組に取り上げられている。

「怖いわね」

台所で朝ごはんを作っている母親がフライ返しを片手にそんな言葉を漏らすと、料理に戻っていく。

確かにここ最近この手のニュースが増えてきている。それをテロだとか言う政治家や、ニュースのコメンテーターが増えている。

パンを片手にコーヒースを啜りながらそんなテレビを見ている。すこし考え事をしている間にニュースが別の話に移っている。今日のニュースも気付いたときには忘れ去られてしまうのだろうか。

暗い話題の後には明るい話題とテレビの中では最近のタレントやら、若手俳優やらの話で盛り上がっている。

「この家が壊されなければいいけど」

料理を終えた母親がエプロンを外すと向かいの席に座った。そんな言葉を聞くと体をびくつかせてしまう。その様子に母親は笑みを浮かべる。

「悠くんは相変わらず怖がりね。そんなんじゃ彼女に嫌われちゃうぞ」

それとこれとは話が違うと言いたいが言葉が出てこない。その代りに顔が赤くなる。

そんな様子の息子を見て母親は微笑むと、自分のカップにコーヒースを注ぐ。照れ隠しにパンにかぶりつく姿を見ながらコーヒースを啜る。

父親は数年前にどこかへ行ってしまう、姿を消してからしばらくして離婚届が届いた。母親はそれを受け取ると何も言わずに判を押して出してしまった。

その日以来、父親についての話は全くし無くなった。別に避けているというわけではないのだが……。

後から聞いた話によれば、結婚する時にそういう約束をしていたらしいのだが、それ以上のことを話してくれない。なので、どういふことかは知らないが、母親がそれで納得しているのだから何もいう事はない。

テレビではピピツという音の後に速報が流れた。どうやら変死の死体が出たらしい。普通なら取り上げられることのないニュースではあるが、崩壊事件と同様にここ最近増えている事件であるために速報で流れる事に。

「嫌な事件ね」

母親そういうと同時にチンツとトースターが鳴りパンが焼けた。パンを取り出すとバターを塗っていく。その光景を見ながらコーヒーを飲み干す。

流しにカップをもって行くとサクツとした気持ちのいい音が聞こえる。それと同時に何かに気付いたのか母親が呼ぶ。

「ちゃんと髪は梳いたの？」

母親の近くまで行くと後ろを向かされた。手近にあった櫛で母親は髪を梳いていく。櫛が髪の間を流れている感触がなんともいえない。

「悠くんの髪ってほんと、女の子みたいね」

母親と言うよりも女友達と言った感じで言葉をかけてくる。その声を聞くとなんともいえない気持ちになる。別に母親に恋をしているというのでは無く……なんと言えいいのかわからない。

肩を叩かれてゴムは……と言われて慌ててポケットを探る。そういえば止めていなかったということに今気付く。

ゴムを渡すと止めてくれるまでの間その場で大人しくしている。

母親が自分の子どもの髪の毛を大切に手入れしている暖かな光景がそこにはあった。

それはただ母親が悠の髪の手入れをしているという事だけではなく、悠の容姿にも関係があるのだろう。スカートを穿かせたらそのまま女の子といわれても何も違和感のないその容姿に。

出来たという合図に母親が悠の肩を叩く。その合図に幼げな表情を浮かべて振り返る。その表情に母親が後ろから抱きつく。

その状況を理解するまでに数秒かかる。理解した時には顔が真っ赤になっていた。

「香奈……」

不意に母親がそう呟く。その言葉に動かされるように悠は母親の背中に手を回すと、子どもを慰めるように優しい声で母親に話しかける。

「私は大丈夫だから……」

しばらくして落ち着いたのか、目に浮かんだ涙を払う。

「ごめんね……」

そうやって謝る母親になんと声をかければいいのかわからなかった。困ったような表情をしていると母親は悠の頭を撫でた。

「悠だって香奈のことは好きだったものね」

面と向かってそんな事を言われて悠は顔を赤くして顔を背ける。

その様子に母親は微笑む。

香奈は悠の双子の姉で、中学校を卒業するのと同じ頃に病気のために無くなった。それまで三人で暮らしていたのが、気付いたら二人になっていた。

テレビの音だけが聞こえる部屋にチャイムの音が響く。その音に母親が時間を確認する。

「いつも時間ぴったりね。たまには迎えに行ったら？　きっと喜ぶわよ」

さっきまでの雰囲気とは変わって小悪魔っぽい笑みを浮かべて言った。いらぬおせっかいだと思う。

早く行きなさいよといった表情をしている。玄関の廊下までついでくると弁当を悠に差し出す。

「変出者には気をつけなさいよ」

「大丈夫だよ」

そんなの気にする事ないよと思いながら靴を履くと弁当を受け取る。

「行ってきます」

そついうと玄関のドアをあける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1557p/>

影喰い

2011年7月6日03時30分発行